

## 【原著】

## 実習目標達成を導く教授活動の構造

— 「看護学実習教授活動理論」の開発に向けた仮説の導出—

山下 暢子 (群馬県立県民健康科学大学)

舟島なをみ (千葉大学)

中山登志子 (国立看護大学校)

吉富美佐江 (聖母大学)

### The Structure of Teaching Activities for Goal Attainment in Nursing Clinical Practicum : Derivation of Hypotheses to Develop a Theory of Teaching Activities in Nursing Clinical Practicum

Nobuko Yamashita RN, DNSc \*<sup>1</sup> Naomi Funashima RN, DNSc \*<sup>2</sup>Toshiko Nakayama RN, DNSc \*<sup>3</sup> Misae Yoshitomi RN, DNSc \*<sup>4</sup>\*<sup>1</sup> Gunma Prefectural College of Health Sciences \*<sup>2</sup> Chiba University\*<sup>3</sup> National College of Nursing Japan \*<sup>4</sup> Seibo College

## Abstract

The purpose of this study was to identify the combinations among the teaching activities that the nursing faculties frequently used at the scene of goal attainment of nursing clinical practicum, and to derive the hypotheses to state predicted relationships the combinations among the teaching activities and goal attainment. Thirteen essential teaching activities of nursing faculty for goal attainment in nursing clinical practicum were used for analysis and the combinations among these teaching activities for goal attainment were identified. As a result, 3 combinations among the teaching activities were identified that the nursing faculties frequently used at the scene of goal attainment of nursing clinical practicum. These combinations were as follows: (a) “Maintaining and changing teaching plans according to various information” and “systemizing and using teaching skills”, (b) “maintaining and changing teaching plans according to various information” and “evaluating the level of goal-attainment and informing students”, and (c) “systemizing and using teaching skills” and “explaining and integrating nursing phenomena with nursing theories and principles by going back and forth between abstract and concrete”.

As a result of discussion, the following hypotheses to state predicted relationships the combinations among the teaching activities and goal attainment were derived: (a) When the faculty maintain or change the teaching plans according to students' behavior and use teaching skills such as demonstration and question flexibly, they can achieve goal attainment, (b) When the faculty maintain or change the teaching plans according to students' behavior and informed the level of acquisition of nursing knowledge and skills, they can achieve goal attainment, and (c) When the faculty use teaching skills such as demonstration and question flexibly and explain and integrate nursing phenomena with nursing theories and principles, they can achieve goal attainment.

## Key words

goal attainment in nursing practicum  
teaching activities  
nursing clinical practicum  
derivation of hypotheses

実習目標達成  
教授活動  
看護学実習  
仮説の導出

## [要旨]

本研究の目的は、教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせを明らかにし、教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を表す仮説を導出することである。先行研究の成果「看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動」を分析に用い、実習目標達成を導くこれら13の教授活動の組み合わせを明らかにした。分析の結果、教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせ3組が明らかになった。教授活動の組み合わせ3組とは、1)【多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【教授技術の組織化と活用】、2)【多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】、3)【教授技術の組織化と活用】と【抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】である。考察の結果、これら3組から、教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を表す3仮説を導出した。3仮説とは、1)『教員が、学生の言動を観察し、それに応じて指導内容や方法を継続・変更するとともに、演示・発問などの教授技術を柔軟に用いる時、実習目標達成を導くことができる』、2)『教員が、学生の言動を観察し、それに応じて指導内容や方法を継続・変更するとともに、知識・技術の修得度を学生に明示する時、実習目標達成を導くことができる』、3)『教員が、演示・発問などの教授技術を柔軟に組み合わせて用い、学生が観察した現象と看護学の本質や法則を結びつけて説明する時、実習目標達成を導くことができる』である。

## I. 緒言

看護学実習を担当する教員の第一義的責任は、効果的な教授活動を展開し、学生が実習目標を達成できるよう支援することにある。しかし、教員の多くは、その教授活動を改善する必要があると自己評価している<sup>1)</sup>。

教授活動を改善するためには、教員が、実習中に生じる現象を予測し、実習目標達成に向かう現象が生じるように教授活動を展開することが重要である。このような教授活動の展開には、理論の活用が有効となる。それは理論が、現象の記述、説明、予測、コントロールという機能を果たす<sup>2)</sup>ことに起因する。

そこで筆者らは、看護学実習中の教授活動改善に役立つ「看護学実習教授活動理論」の開発を旨として研究を継続、累積している。この理論の開発に向けて、先行研究<sup>3)</sup>は、実習中の教員が展開している教授活動を解明した研究成果3件<sup>4)5)6)</sup>をメタ統合の手法により統合し、看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動を解明した。

本研究は、理論開発の次段階に位置づき、先行研究が解明した13の教授活動をどのように組み合わせた時、実習目標達成を導けるのかを表す仮説を導出することを目指す。

本研究により導出された仮説は、学生の実習目標達成に対するより効果的な支援に向け、教授活動を改善するための重要な知識となる。

## II. 研究目的・目標

## 1. 研究目的

実習目標達成場面を「看護学実習の目標達成に必要な不

可欠な13の教授活動」を用いて分析して教員が高い頻度で用いた教授活動の組み合わせを明らかにし、教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を表す仮説を導出する。

## 2. 研究目標

- 1) 実習目標達成場面を「看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動」を用いて分析し、教員が高い頻度で用いた教授活動の組み合わせを明らかにする。
- 2) 1)の結果明らかになった教授活動の組み合わせを文献に基づき考察し、教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を表す仮説を導出する。

## III. 用語の概念規定

## 1. 看護学実習(nursing clinical practicum)

看護学実習とは、学生が既習の知識・技術を基に、クライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた看護現象を教材として、看護実践に必要な基礎的能力を修得するという実習目標達成を旨とする授業<sup>7)</sup>である。

## 2. 教授活動(teaching activities)

教授活動とは、教育目標の達成に向け、教員が教材を媒介にして知識、技術の修得を旨とする学生の学習活動を支援する活動<sup>8)9)</sup>である。

## 3. 実習目標達成場面(the scene of goal attainment of nursing clinical practicum)

実習目標達成場面とは、教授活動の展開によって学生が必要な内容を獲得し、実習目標に接近・到達している場面である。また、必要な内容には、目標を達成するために修得すべき知識・技術のみならず、問題の解決方法や学習方法なども含む。

#### IV. 文献検討

研究目的の達成に向け、本研究が用いる仮説の導出方法を次の通り検討した。

仮説の導出方法には、帰納と演繹という2つの基本的プロセスがある<sup>10)</sup>。このうち帰納は、個別的な観察に始まって一般化へと向う過程である。一方、演繹は、はじめに一般的な法則、または理論があり、個別的な状況にそれを適用する過程である<sup>11)</sup>。本研究は、はじめに一般的な法則を持たず、看護学実習中の個別状況に存在している「教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせ」を明らかにし、それに類似した現象を説明する普遍性の高い仮説の導出を目指す。このことは、本研究の目的を達成するためには、実際に観察できた実習目標達成場面に含まれる教授活動から仮説を導出する方法、すなわち個別から一般という方向の帰納的方法を用いることが適切であることを示す。

また本研究は、教員が教授活動をどのように組み合わせた時、実習目標達成を導けるのかを表す仮説を導出することを旨とする。先行研究の成果「看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動」は、教員が実習目標達成を導くための教授活動を網羅している。これは、この成果を用いて分析することにより、実習目標達成を導いた場面において展開された教授活動が13の教授活動のどのような組み合わせにより成立するのかを明らかにできる可能性を示す。

以上の検討から、本研究が用いる仮説の導出方法を次の通り決定した。それは、帰納的であり、具体的には、実際の実習目標達成場面に含まれる教授活動を「看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動」を用いて分析する方法である。

また、13の教授活動<sup>12)</sup>とは、【1. 教授技術の組織化と活用】【2. 看護の質保証・学習過程円滑化に向けた患者への弊害未然防止】【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】【4. 予測される危険からの学生擁護】【5. 学生の健康状態掌握による学習停滞の黙認と打破】【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】【7. 円滑な授業展開に向けた実習環境の調整】【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】【9. 複数学生個別指導のための好機・適所の探索・確保】【10. 学生心情の受容と共感】【11. 学生への指導浸透不十分の容認と看過】【12. 重要現象抽出・再現による学生個別体験の補完と共有化】【13. 医療現場への配慮を伴うスタッフへの支援要請と獲得】である。

#### V. 方法

##### 1. データの選定

筆者らは、これまで、データ収集法として参加観察法（非参加型）を採用し、看護学実習中の教授活動・学習活動に関する4件の研究<sup>13)14)15)16)</sup>を遂行した。これらはすべて、信用性の高い研究成果を産出している。このことは、これらの遂行過程を通して、確実性を確保したデータを収集できていることを示す。

そこで、信用性の高い成果産出を旨とし、これら4件の研究者が、実習目標達成場面を参加観察し、そこでの相互行為場面を分析に耐えうるデータとするためにプロセスレコードとして加工した記述を本研究のデータとして選定した。

##### 2. 分析

###### 1) 対象場面の抽出

本研究は、教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を表す仮説を導出する初めての取り組みであり、まず、多様な場面に適用できる仮説の導出を目指す。そこで、次の過程を経て、可能な限り多様な性質の実習目標達成場面を対象場面として抽出した。

- (1) データとして選定した記述がどのような実習目標達成場面、未達成場面から構成されているのかを分析フォーム1〈場面の概要〉(表1)を用いて整理し、すべての実習目標達成場面を抽出した。
- (2) 各実習目標達成場面に含まれる教授活動の性質を見極め、その性質の類似性に基づき場面の集合体を形成した。その際、各場面が教員主導型か否か、あるいは実習目標達成に直接関わる場面か否かなどの視点から教授活動の差異を検討した。
- (3) 形成された各集合体から、そこに共通する性質を最も典型的に表す場面を1つずつ抽出し、対象場面とした。

表1 分析フォーム1〈場面の概要〉

| 観察現象  | 年/月/日  | 概要: |
|-------|--|-----|
| 観察対象者 | 教員   |     |
|       | 学生   |     |
| 場面番号  | 実習目標達成場面・未達成場面の概要<br>(○は同質の教授活動に共通する性質を典型的に表す場面) |     |
|       |  |     |
|       |  |     |

表2 分析フォーム2<対象場面に含まれる教授活動検討用>

|          |       |        |          |
|----------|-------|--------|----------|
| 場面番号     | 年/月/日 | 場面の概要: |          |
| 観察対象者    | 教員:   |        |          |
|          | 学生:   |        |          |
| 観察した相互行為 |       | 解 釈    | 該当する教授活動 |
| 学習活動     | 教授活動  |        |          |
|          |       |        |          |
|          |       |        |          |

2) 教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせの解明

(1)「看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動」を用いた対象場面の分析

対象場面に含まれる教授活動が、「看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動」のうちのどれに該当するのかを検討するために、分析フォーム2<対象場面に含まれる教授活動検討用>(表2)を作成した。このフォームを用いて、次の過程を経て対象場面を分析した。

- ①対象場面を構成した学習活動・教授活動を時間的経緯に沿って「学習活動」「教授活動」欄に転記した。
- ②①の「教授活動」を研究者がどのように解釈したのかを「解釈」欄に記述した。
- ③①の「教授活動」が「看護学実習の目標達成に必要な不可欠な13の教授活動」のどれに該当するのかを「該当する教授活動」欄に記述した。

(2)教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の選定

13の教授活動を横軸、対象場面を縦軸とする<各教授活動の出現頻度検討フォーム>(表3)を作成し、このフォームを用いて、次の過程を経て分析した。

表3 各教授活動の出現頻度検討フォーム

|               | 教授活動【1】 | 教授活動【2】 | 教授活動【3】 | 教授活動【4】 | 教授活動【5】 | 教授活動【6】 | 教授活動【7】 | 教授活動【8】 | 教授活動【9】 | 教授活動【10】 | 教授活動【11】 | 教授活動【12】 | 教授活動【13】 |
|---------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|
| 場面1           |         |         |         |         |         |         |         |         |         |          |          |          |          |
| 場面2           |         |         |         |         |         |         |         |         |         |          |          |          |          |
| 場面3           |         |         |         |         |         |         |         |         |         |          |          |          |          |
| 場面n           |         |         |         |         |         |         |         |         |         |          |          |          |          |
| 各教授活動の出現場面合計数 |         |         |         |         |         |         |         |         |         |          |          |          |          |
| 各教授活動の出現頻度    |         |         |         |         |         |         |         |         |         |          |          |          |          |

①各場面に着目し、その場面に13の教授活動のうちどれが含まれていたのかを確認し、表中の「教授活動」の該当欄に印を記入した。

②各教授活動に着目し、その教授活動が出現していた場面数を明らかにし、「各教授活動の出現場面合計数」欄に記入した。

③②にて明らかにした合計数を対象場面総数を用いて除した値を「各教授活動の出現頻度」欄に記入した。

④③の結果に基づき、出現頻度の高い教授活動、すなわち、教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動を選定した。

(3)教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせの解明

まず、(2)にて選定した教授活動個々を用いて考えられるすべての組み合わせを形成した。

次に、形成した教授活動の組み合わせを横軸、対象場面を縦軸とする<各教授活動の組み合わせの出現頻度検討フォーム>(表4)を作成し、このフォームを用いて、次の過程を経て分析した。

- ①各場面に着目し、その場面にどの教授活動の組み合わせが含まれていたのかを確認し、表中の「教授活動の組み合わせ」のうち該当する欄に印を記入した。
- ②各教授活動の組み合わせに着目し、その組み合わせが含まれていた場面数を明らかにし、「各組み合わせの出現場面合計数」欄に記入した。
- ③②にて明らかにした合計数を対象場面総数を用いて除した値を「各組み合わせの出現頻度」欄に記入した。
- ④③の結果に基づき、出現頻度の高い教授活動、すなわち、教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせを選定した。

表4 各教授活動の組み合わせの出現頻度検討フォーム

|                    | 教授活動の<br>組み合わせ<br>【a】【b】 | 教授活動の<br>組み合わせ<br>【b】【c】 | 教授活動の<br>組み合わせ<br>【a】【c】 | 教授活動の<br>組み合わせ<br>【a】【b】【c】 |
|--------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|-----------------------------|
| 場面1                |                          |                          |                          |                             |
| 場面2                |                          |                          |                          |                             |
| 場面3                |                          |                          |                          |                             |
| 場面n                |                          |                          |                          |                             |
| 各組み合わせの<br>出現場面合計数 |                          |                          |                          |                             |
| 各組み合わせの<br>出現頻度    |                          |                          |                          |                             |

\* (2)の結果、教授活動【a】【b】【c】を選定した場合のフォームを例示した

### 3. 倫理的配慮

データとした記述の使用に際し、以下3点の倫理的配慮を行った。第1に、その記述のもととなった現象が、綿密な倫理的配慮に基づき収集されたことを確認した上で本研究のデータとした。第2に、観察対象者を個人として特定できないよう、コードネームを用いて記載された記述のみをデータとして使用した。第3に、データとした記述を研究目的のみに使用し、厳重に管理した。

### 4. 信用性の確保

本研究の信用性<sup>1)</sup>を確保するために、次の手続きをとった。①質的研究に精通し、理論検証の経験のある研究者、多様な教育課程・領域において看護学実習に携わった経験のある研究者により研究プロジェクトを組織した。②分析フォーム2<対象場面に含まれる教授活動検討用>に記述した内容をもとに、各教授活動の解釈とともにその教授活動が「看護学実習の目標達成に必要な13の教授活動」のどれに該当するのかなどの妥当性を繰り返し検討した。③仮説を導出する方法を繰り返し検討・修正した。

## VI. 結果

データとして選定した記述は38であり、これらは、103の実習目標達成場面、8つの未達成場面から構成されていた。

観察対象であった教員は14名であった。そのうち3名は大学に所属しており、9名が短期大学、2名が看護専門学校に所属していた。教育経験年数は1年未満から20年、臨床経験年数は3年から16年であった。担当領域は、基礎看護学、成人看護学、母性看護学、精神看護学、老年看護学であった。

### 1. 対象場面数

103の実習目標達成場面は、そこに含まれる教授活動の類似性・相異性に基づき56種類に分類できた。これら56種類から典型的な場面を1つずつ抽出し、56場面を対象場面とした。

### 2. 教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動

対象場面における各教授活動の有無を検討した結果、【11. 学生への指導浸透不十分の容認と看過】を除く12の教授活動が56場面いずれかに出現していた。

また、12の教授活動のうち最も出現頻度の高かった教授活動は、【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】(76.8%)であり、次いで、【1. 教授技術の組織化と活用】(62.5%)、【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】(33.9%)、【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】(26.8%)、【2. 看護の質保証・学習過程円滑化に向けた患者への弊害未然防止】(19.6%)の順であった(図1)。

これらのうち【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】【1. 教授技術の組織化と活用】【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】は、実習中の多様な場面にみられる教授活動である。一方、【2. 看護の質保証・学習過程円滑化に向けた患者への弊害未然防止】は、学生の看護実践に伴い問題が生じる可能性のある場面にしかみられない教授活動である。

先述の通り、本研究は多様な場面に適用できる仮説の導出を目ざすため、出現頻度に基づき、多様な場面にみられる【3】【1】【8】【6】を「教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動」として選定した。

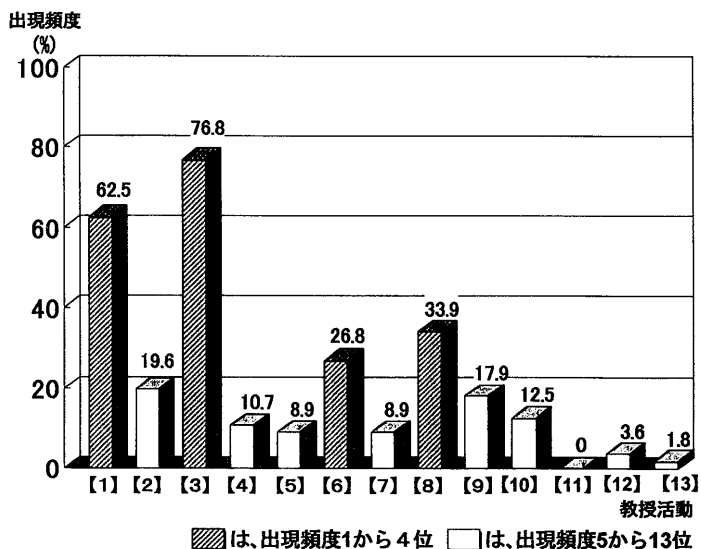


図1 各教授活動の出現頻度

### 3. 教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせ

選定した教授活動【3】【1】【8】【6】を用いて形成可能な組み合わせは11組存在した。対象場面におけるこれら11組の有無を検討した結果、11組すべてが56場面いずれかに出現していた。

また、11組のうち最も出現頻度の高い組み合わせは、【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【1. 教授技術の組織化と活用】(51.8%)であり、次いで【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】(25.0%)、【1. 教授技術の組織化と活用】と【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】(23.2%)の順であった(図2)。

以上より、これら3組が、「教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせ」であることが明らかになった。そこで、これら3組を考察の対象とした。

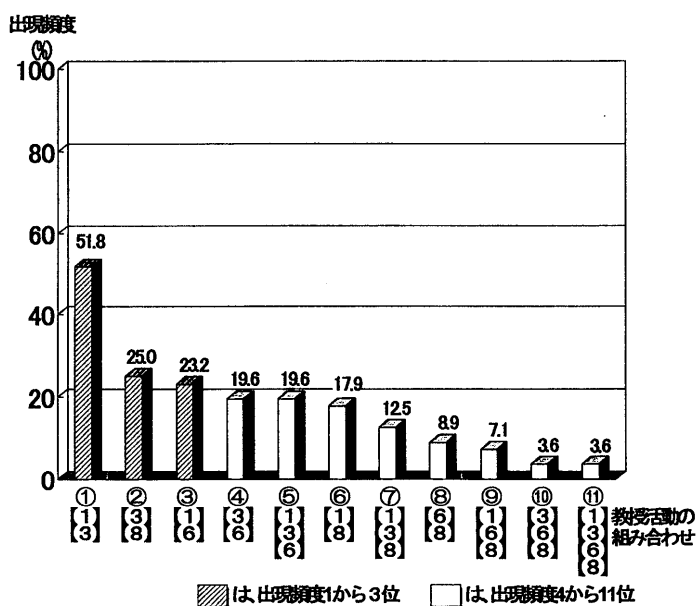


図2 教授活動の組み合わせの出現頻度

## Ⅶ. 考察

### 1. 対象場面における各教授活動および教授活動の組み合わせの有無

まず、対象場面における各教授活動の有無を検討した。その結果、13の教授活動のうち【11. 学生への指導浸透不十分の容認と看過】を除く12の教授活動が56場面のいずれかに出現していたことが明らかになった。これは、12の教授活動が実習目標達成を導く可能性が高いことを示唆した。

「教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動」として選定した4つの教授活動を用いて形成

可能な組み合わせは11組存在しており、次に、対象場面におけるこれら11組の有無を検討した。その結果、11組すべてが56場面いずれかに出現していたことが明らかになった。これは、教授活動の組み合わせ11組すべてが実習目標達成を導く可能性が高いことを示唆した。

### 2. 教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を表す仮説の導出

本研究は、「看護学実習教授活動理論」の開発に向けて、教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を表す仮説を導出することを旨とする。そこでまず、明らかになった教授活動の各組み合わせを「それは確かに実習目標達成を導くのか」という視点から文献に基づき検討した。

また、仮説は、変数が何であり、研究者が何を研究しようとしているのかが十分伝わるよう具体的に設計する必要がある<sup>18)</sup>。そこで次に、各教授活動を表す抽象的な概念を具体的な表現へ置きかえた。

最後に、具体的な表現へ置きかえた教授活動の組み合わせと実習目標達成の関係を陳述し、仮説とした。

#### 1)【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と

##### 【1. 教授技術の組織化と活用】

教員は、実習目標達成場面において、高い頻度で【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【1. 教授技術の組織化と活用】の組み合わせを用いていた。

このうち【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】は、多角的な情報収集を通して指導の効果を把握し、それに合わせて計画していた指導内容や方法を継続したり、変更したりする教授活動を表す。また、【1. 教授技術の組織化と活用】は、多様な教授技術を柔軟に組み合わせ活用する教授活動を表す。

先行研究<sup>19)</sup>は、演示の活用が、学生の看護技術の修得度を向上することを明らかにした。看護技術は、看護実践を具現化する過程の重要な部分を占め<sup>20)</sup>、その修得度向上は看護実践能力修得に直結する。また、看護学実習は、学生が基礎的な看護実践能力の修得という実習目標達成を旨とする授業である<sup>21)</sup>。これらは、演示という教授技術の活用が、学生の看護実践能力修得、すなわち、実習目標達成を導く可能性を示す。

また、先行研究<sup>22)23)</sup>は、発問の活用が、学生の批判的思考を促すことを明らかにした。看護学教育の在り方に関する検討会<sup>24)</sup>は、批判的思考の体験が、学士課程において育成すべき看護実践能力の修得に重要であると指摘し、批判的思考が学生の看護実践能力修得を導く可能性を示唆した。これらは、発問という教授技術の活用が批判的思考を促し、そのことが学生の看護実践能力修得、

すなわち、実習目標達成を導く可能性を示す。

以上は、発問・演示など教授技術の活用が、実習目標達成を導く可能性を示す。

また、教授技術とは、教育のねらいを達成するために、効果的と判断される教授行動のパターン<sup>29)</sup>である。これは、教授技術の活用には、その時々々の学生に対して何が効果的かを判断することが重要であり、その前提として学生をさまざまな角度から観察する必要があることを示す。

以上は、【1. 教授技術の組織化と活用】とその前提となる【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】を組み合わせる用いた時、実習目標達成を導ける可能性を示唆した。そこで、これら2つの教授活動を具体的な表現へ置きかえた後、2つの教授活動と実習目標達成の関係を陳述し第1の仮説とした。

第1の仮説とは、『教員が、学生の言動を観察し、それに応じて指導内容や方法を継続・変更するとともに、演示・発問などの教授技術を柔軟に用いる時、実習目標達成を導くことができる』である。

## 2) 【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】

教員は、実習目標達成場面において、高い頻度で【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】の組み合わせを用いていた。

このうち【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】は、先述の通り、多角的な情報収集を通して指導の効果を把握し、それに合わせて計画していた指導内容や方法を継続したり、変更したりする教授活動を表す。また、【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】は、看護実践に必要な学生の知識・技術・態度の修得状況を実習目標と照合して評価し、目標の達成度を学生個々に明示する教授活動を表す。

先行研究は、目標達成度の評価と明確な伝達が、学生の実践能力向上に繋がる<sup>26)</sup>ことを明らかにした。看護学実習は、看護実践に必要な基礎的能力の修得を目ざす授業であり、看護実践能力の向上は目標達成そのものである。これは、目標達成度の評価と明確な伝達が、実習目標達成を導く可能性を示す。

また、教育の評価とは、目的・目標を基準として、学生の知識・技術・態度を調べ、あるいは測定した結果などのさまざまな条件を含めた上で、総合的に価値決定を行うこと<sup>27)</sup>である。これは、目標達成度の評価には、学生をその知識・技術・態度などさまざまな角度から観察することが前提となることを示す。

以上は、【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と

伝達】とその前提となる【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】を組み合わせる用いた時、実習目標達成を導ける可能性を示唆した。そこで、これら2つの教授活動を具体的な表現へ置きかえた後、2つの教授活動と実習目標達成の関係を陳述し第2の仮説とした。

第2の仮説とは『教員が、学生の言動を観察し、それに応じて指導内容や方法を継続・変更するとともに、知識・技術の修得度を学生に明示する時、実習目標達成を導くことができる』である。

## 3) 【1. 教授技術の組織化と活用】と【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】

教員は、実習目標達成場面において、高い頻度で【1. 教授技術の組織化と活用】と【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】の組み合わせを用いていた。

このうち【1. 教授技術の組織化と活用】は、先述の通り、多様な教授技術を柔軟に組み合わせる活用する教授活動を表す。また、【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】は、学生の体験に基づいて具体的な事象を自由自在に再現したり、それを既習の知識に照らし合わせることを繰り返しながら、看護現象を看護学の本質や法則に結びつけて解説し、統合する教授活動を表す。

先行研究<sup>28)29)</sup>は、学生の観察した具体的な現象を既習の知識に関連づけて意味づけていくことが、目標達成に効果的であったことを明らかにした。また、学生の遭遇した具体的な現象を解説すると同時に、発問などの教授技術を合わせて活用することが目標達成に効果的であることも明らかにした。

以上は、【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】と同時に【1. 教授技術の組織化と活用】を組み合わせる用いた時、実習目標達成を導ける可能性を示唆した。そこで、これら2つの教授活動を具体的な表現へ置きかえた後、2つの教授活動と実習目標達成の関係を陳述し第3の仮説とした。

第3の仮説とは『教員が、演示・発問などの教授技術を柔軟に組み合わせる用い、学生が観察した現象と看護学の本質や法則を結びつけて説明する時、実習目標達成を導くことができる』である。

## 3. 「看護学実習教授活動理論」開発に向けた今後の課題

「看護学実習教授活動理論」開発に向けた今後の課題は、本研究により導出された3仮説の検証である。

仮説の検証には、1) 実践への活用に基づく検証、2) 経験的検証、3) 個人的体験の記述に基づく検証、4)

批判的推論に基づく検証の4種類の方法がある<sup>30)31)</sup>。このうち1) 実践への活用に基づく検証は、実践に役立つものである時にその理論を真理とみなすという考え方(真理の実用説)を前提にしている<sup>32)</sup>。

筆者らは、看護学実習中の教授活動の改善に役立つ「看護学実習教授活動理論」の開発を旨としている。これは、実践への活用に基づく検証と「看護学実習教授活動理論」開発の前提が共通することを示し、実践への活用に基づく検証が、本研究に続く研究の方法として有効である可能性を示す。

今後は、実践への活用に基づく検証を用いて、実際の看護学実習中に仮説の表す教授活動を意図的に展開し、目標達成を実現できたかどうかを確認する必要がある。

これを通して仮説を検証できた時、これら3仮説は「看護学実習教授活動理論」を構成する命題となる。

## VIII. 結論

1. 本研究の結果は、教員が実習目標達成場面において高い頻度で用いた教授活動の組み合わせ3組を明らかにした。その組み合わせとは、【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【1. 教授技術の組織化と活用】、【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】、【1. 教授技術の組織化と活用】と【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】である。

2. 【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【1. 教授技術の組織化と活用】は、実習目標達成を導ける可能性が高い。これらから、第1の仮説『教員が、学生の言動を観察し、それに応じて指導内容や方法を継続・変更するとともに、演示・発問などの教授技術を柔軟に用いる時、実習目標達成を導くことができる』を導出できた。

3. 【3. 多角的情報収集による指導計画の維持と転換】と【8. 実習状況査定による目標達成度の評価と伝達】は、実習目標達成を導ける可能性が高い。これらから、第2の仮説『教員が、学生の言動を観察し、それに応じて指導内容や方法を継続・変更するとともに、知識・技術の修得度を学生に明示する時、実習目標達成を導くことができる』を導出できた。

4. 【1. 教授技術の組織化と活用】と【6. 抽象化・具象化反復による看護現象の解説と原理への統合】は、実習目標達成を導ける可能性が高い。これらから、第3の仮説『教員が、演示・発問などの教授技術を柔軟に組み合わせて用い、学生が観察した現象と看護学の本質や法則を結びつけて説明する時、実習目標達成を導くことができる』を導出できた。

5. 今後は、3仮説の実践への活用に基づく検証、すなわち、実際の看護学実習中に仮説の表す教授活動を意図的に展開し、目標達成を実現できたかどうかを確認することが課題である。

これを通して仮説を検証できた時、これら3仮説は「看護学実習教授活動理論」を構成する命題となる。

## 【引用文献】

- 1) 小川妙子他：看護学実習における教授活動に関する研究—教員特性と教授活動の関係に焦点を当てて—, 看護教育学研究, 5(1), 22-40, 1996.
- 2) Torres, G. : 横尾京子監訳：看護理論と看護過程, 医学書院, 19, 1996.
- 3) 松田安弘他：看護学実習の目標達成に必要な教授活動の解明—質的研究3件のメタ統合を通して—, 看護教育学研究, 14(1), 51-64, 2005.
- 4) 小川妙子他：看護学実習における教員の教授活動—学生と患者との相互行為場面における教員行動に焦点を当てて—, 千葉看護学会会誌, 4(1), 22-40, 1996.
- 5) 廣田登志子他：実習目標達成に向けた教員の行動に関する研究—看護学実習における学生との相互行為場面に焦点を当てて—, 看護教育学研究, 10(1), 1-14, 2001.
- 6) 中山登志子他：看護学実習カンファレンスにおける教授活動, 看護教育学研究, 12(1), 1-14, 2003.
- 7) 舟島なをみ：看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題, *Quality Nursing*, 7(3), 6, 2001.
- 8) 杉森みど里, 舟島なをみ：看護教育学 第4版, 医学書院, 259, 2004.
- 9) 細谷俊夫他編：新教育学大事典, 第2巻, 「教授」の項, 329, 1990.
- 10) Polit, D. F. et al. : *Nursing Research : Principles and Methods*, 7th ed., Lippincott Williams & Wilkins, 79, 2004.
- 11) 前掲書10), 80.
- 12) 前掲書3), 51-64.
- 13) 前掲書5), 1-14.
- 14) 前掲書6), 1-14.
- 15) 山下暢子他：看護学実習における学生行動の概念化, 看護教育学研究, 12(1), 15-28, 2003.
- 16) 吉富美佐江他：看護学実習における現象の教材化の解明, 看護教育学研究, 13(1), 65-78, 2004.
- 17) Lincoln, Y. S., Guba, E. G. : *Naturalistic Inquiry*, SAGE Publication, 15, 1985.
- 18) 前掲書10), 66.
- 19) 志賀厚子他：小児看護学実習におけるロールモデル



- による指導—学生の反応と学習上の効果—,看護展望,  
28(10), 2003.
- 20) 外間邦江:看護技術の教育に関する今日の問題と課題,メヂカルフレンド編集部,看護技術論,1,メヂカルフレンド社,356,1977.
- 21) 前掲書7), 6.
- 22) Gerrish, K.:The Nurse Teacher's Role in the Practice Setting, Nurse Education Today, 12(3), 227-232, 1998.
- 23) Pond, E. F. et al.:Teaching Strategies for Critical Thinking, Nurse Educator, 16(6), 18-22, 1991.
- 24) 看護学教育の在り方に関する検討会:看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標,看護学教育の在り方に関する検討会報告, 28, 2004.
- 25) 安彦忠彦他編:新版現代学校教育大事典,「教授スキル」の項,ぎょうせい, 383, 2004.
- 26) 武藤紀子他:地域看護実践能力の向上をめざす到達目標を用いた学士課程の教育方法の検討,千葉大学看護学部紀要, 26, 51-56, 2003.
- 27) 前掲書8), 296.
- 28) 磯部里香他:成人看護学実習 I の教育的効果および課題—実習前後のレポート内容を分析して—,日本看護学会論文集-看護教育-, 36, 245-247, 2005.
- 29) 寺本かおり他:臨地実習で看護学生が泣く意味と教育方法,日本看護学教育学会第13回学術集会講演集, 151, 2003.
- 30) Silva, M. C. & Sorell, J. M.:Testing of Nursing Theory, Critique and Philosophical expansion, Advances in Nursing Science, 7(3), 12-23, 1992.
- 31) Fawcett, J.: Analysis and Evaluation of Nursing Theory, F. A. Davis Company, 251-252, 1993.
- 32) 舟島なをみ:看護教育学研究 発見・創造・証明の過程,医学書院, 144, 2005.